



1985年(昭和60年)
8月号(No. 482)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- 成瀬君の旧蔵書から
島田 巽……………(1)
- 創立八十周年記念晩餐会(越後)……………(2)
鈴木敏雄・小倉 厚
- 図書紹介……………(3)
「現代山岳紀行 ヨーロッパアルプス」
「いつまでも——山」「山崎安治著『登山史の周辺』について」
- 海外委員会例会講演会……………(5)
“ニュージーランドあれこれ”
- 東西南北……………(6)
“上高地で歌の交歓”“丹水会例会”
- 報告……………(7)
「ウェストン祭(信濃支部)」「祖母・傾山系原生林保護と伐採計画見直の要望書提出」
- 図書受入報告 図書委員会……………(8)
- 会務報告・会員移動・ルーム日誌……………(8)
- 八十周年第二次募金応募者ご芳名……………(11)
- お知らせ……………(11)
「記念晩餐会(富山)」「ビアパーティ」
「温泉と写真の山旅」「現地小集会」

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祝日・月曜を除く毎日
13時～20時

◎ルーム閉室のお知らせ

8月1日～8月31日
八十周年記念行事の展覧会開催のため、ルーム、談話室、図書室は使用できません。各委員会などで行事や会合を予定しているところはご注意下さい。なお、事務局は開いていますから連絡はとれます。

お知らせ電話
234 六六五九

成瀬君の旧蔵書から

島田 巽

故成瀬岩雄君の旧蔵書のうち、本会図書室にない洋書七十四点を購入したことは、すでに本誌四七七号に報告され、その目録も同号以降に連載されている。

成瀬君は大島亮吉さんとも親しく、その影響を受けたためか、『先蹤者』に記されているような欧州アルプスの先駆者たちの業績に幅広い関心を抱いていた。ヒマラヤ、指向の風潮にも意識的に従わず、もっぱらアルパイン・クラシックスの分野を固守しつづけた。したがって蔵書にも、その分野で世界的に貴重な古典とされているものが、かなり含まれている。

それらについて、単に書名だけを列記しただけでは、勿体なく思われるので、とくに注目すべき文

献について、ごく概略だけでも紹介しておきたい。

まず最も刊行年の古い著作として *A relation of a journey to the glaciers in the Duchy of Savoy* がある。一七七六年刊で、マルク・テオドル・ブリー原著の英訳本。ブリーはド・ソシュールより前にモン・ブラン初登を企て、先陣争いに破れたが非常に多才な人物だったらしく、本書はシヤモニー周辺の氷河観察記である。一〇×一六・五cmの小型ながら二百年を越える年輪が感じられる。

これに次いで一八四八年刊の J・D・フォーブス著 *A physician's holiday: a month in Switzerland* をはじめとして、十九世紀中の刊

行書が二十二点含まれている。フォーブスは周知の通り水文学の先達で、その成果は別の著書に収められ、右の本は文献目録にもあまり掲げられない稀書といえる。

この書が出て六年后、一八五四年に A・ウィルズのヴェクターホルン登頂があつて、近代登山の幕が開かれた。いわゆるアルプス黄金時代、それに銀の時代が続くとされるが、成瀬君の旧蔵書の中心は正にこの期間に置かれている。

右のウィルズの名著 *"The Eagle's Nest" in the valley of Sixt; a summer home among the Alps*, (第二版・一八六〇年) も受入れ目録にある。ウィルズは英国山岳会第三代会長を務めたが、初代会長 J・ボールの *The Western Alps* (一八九八年)、第二代会長

E・S・ケネディの C・ハドソンの共著 *An ascent of Mont Blanc* (第二版・一八五六年)、第七代会長の T・W・ヒンチリフの *Summer months among the Alps: with the ascent of Monte Rosa* (一八五七年) なども、今回の譲受け目録中に光っている。

これらは、いずれも前世紀の名著と格づけされたものだが、単に古いだけで価値があるということではなく、登山史研究のためにも貴重な役割を果たしてくれものが少なくない。その好例として、右に挙げたハドソン、ケネディ共著などがある。この本のタイトルは実は大変長いもので、「意思あれば道あり」新登路からのガイドを伴わぬモン・ブラン登頂。アルプス黄金時代に、新ルートによ

みんなで八十周年記念事業を成功させよう！

案内人とのアルプス登攀もまた、アルプス早期登山史に欠かせないエピソードを生んできた。成瀬君が愛蔵していたクリスチャン・アルマーの案内人手帳の覆刻版 *A facsimile of Christian Almer's Führebuch 1866-1894* は、それらの史料として抜群のものといえる。

この覆刻版はアルマーの一八五六年から九四年までの三十八年間に、行をともした登山家たちが、それぞれ手記した手帳の再現で、彼の死去二年前にロンドンで刊行された。わずかに二百部しか作られず、その五十五番が本会の新蔵書となった次第である。単に覆刻が珍しいというだけでなく、当時これが公けにされたことから、いろいろな波紋が生じ、激しい論議を呼んだりした点でも、重要視されている史料である。

限定版のついでに、時代は新しく、一九三八年刊だが、百二十五部限定の私家版に触れておきたい。それは英国山岳会会長を一九二九—三一年の間つとめたクロード・ウィルソンの著 *An epitome of fifty years' climbing (一九三八年)* と題して、自己の登山五十年を記念して、その足跡を克明に記録して知友に頒つたもので、当時、本会にも寄贈され、若輩の私が「山岳」(第二十八年二号)に紹介の一文を記している。その意味でも懐かしい再会であるが、松

方さんも本書について「自分の登山経歴をかくも詳細に残した著者の丹念さ、また前後二三八回ものガイドレス・クライムにただの一度のアクシデントも起して居ない彼の技能の優秀さにはただ驚入るの外はない」と賞讃している。

このウィルソンの私家版と同じように、戦災以前に虎の門の図書室に備えられていた貴重な図書のいくつかが復旧できたわけだが、それらの書目には、クリリッジ、フレッシュフィールド、ウインパ、ギルバート、法王ビウス十一世、タケット、イエルドなど、アルプス登山史に輝かしい足跡をのこした人たちの著作が含まれている。

また、それらの中には本会創立三十周年記念の山岳図書展覧会に出陳されたものも少なくない。出陳書については、その展覧会目録に、松方さんがそれぞれ簡にして要を得た解説を記されているので併読されるようおすすめしたい。山岳図書展の目録は「山岳」第三十一年第一号に付録として、全文収録されている。



図書
紹介

創立八十周年

記念晩餐会(越後)

鈴木 敏雄

日本山岳会創立八十周年記念晩餐会(越後)は新緑薫る六月十五、十六日、本会設立発起人高頭仁兵衛翁縁りの地、長岡市北越銀行ホールで開催された。

梅雨季の越後路もこの日は全国各地からの会員を笑顔で迎え新緑も一段と彩えて珍しく快晴。

会場は定刻前から会員が次々と駆付け、広いロビーも埋まる。一五〇余点の展示作品も肩越しに眺めるほどで会場には唯々感嘆の会話が満ちる。会場受付では若手会員が県外会員、県内会員に分けて晩餐会出欠、宿泊、バスの割当て、山行等手際よく処理する。

開会間近には三二〇名の参加者で広いホールも満席、急拠補助椅子を出すやらで大喧嘩。

定刻十三時、加藤記代子会員の司会で創立八十周年記念事業(越後)の開催を宣言。

佐藤支部長は意義あるこの記念事業を当支部で開催できたことは真に欣快の至り、全国各地から会員多数が参加されたが、この二日間、共に交流を深めこの会が今後皆さんの潤い豊かな山行のお役に立つことができれば幸いですと開会の挨拶。今西寿雄会長より、本会の創設者、高頭仁兵衛翁の偉大な功績と越後支部の興隆を祈りながらこの記念事業が盛大かつ有意義な会となるよう祈念してやまない、との挨拶を頂戴する。祝電披露に続き、西堀栄三郎元会長より「昔の登山・未来の登山」と題し記念講演を戴く。

マナスルの許可をとるためネパール政府の館で明治天皇の御真影が飾ってあるその前で最敬礼をしたことで、やはり日本人だと認められ、念願か

なつてマナスルの門戸は開かれた、などエピソードを混えたお話しの後、本県の地質学界の権威で登山にも造詣の深い新潟大学教授、茅原一也先生の「越後山岳の地質的特質」と題したスライドによる講演を戴き、第一会場の行事を終る。

バスを連ねて越後の田園地帯を通り大滝山、正林寺に向かう。

正林寺は高頭翁の眠る菩提寺で、ひっそりと静まり返った山門を登り、鐘楼左手の大きな一本の高野槇の基に高頭翁のお墓がある。墓前に日本山岳会と越後支部の生花を献げ、果物を供え、会員奥津五郎氏の案内で参拝者一同合掌、読経の続く中を西堀元会長、今西会長、高頭寿久氏、佐藤支部長とそれぞれ焼香、先達の偉業とその先駆を偲び想も新たに山門を後にし長岡美酒「美の川」酒蔵の門を尋ねる。

片岡博氏の案内で、七代目社長松本さんから、古びた酒蔵ですがゆくりと見學し、当社自慢の品を「賞味頂ければ幸いです」と挨拶され、見學もそこそこ中庭に廻り、瓶を開ける。心尽しの山菜も山と盛られ、あれやこれやと、試飲がついつい……！ 帰りに藪被りと各自記念の枵を頂戴し、次の会場に向かう。バスが東泉閣に到着するや否や、玄関前で今西会長を開き記念撮影となる。なにしろ一五〇名からの撮影はこれまた大変、先程の試飲も手伝ってか笑の洪水。

東泉閣館内放送が日本山岳会記念晩餐会の開催を告げる。二〇四名の会員で会場は寿司詰めの有様。山田智子会員の司会で佐藤支部長は、肩の凝らない山菜と地酒の野趣溢れる晩餐会といたしますがよろしく、と挨拶、佐々前会長より越後支部は全国で二番目に大きい支部であるが、御大、玄さんの顔の見えないのが非常に残念である、明日は全員元気に八海山に登って欲しい、と挨拶を頂戴し、望月達夫氏より、越後支部には知人も多く

現代山岳紀行

ヨーロッパアルプス

山下喜一郎編

本書は現代山岳紀行シリーズの『槍・穂高連峰』『続・槍・穂高連峰』『白馬・後立山連峰』『剣・立山連峰』につづく五冊目にあたり、マッターホルン、アイガー、グラ

ンド・ジョラスの三大北壁の輝かしい登攀記を含む、ヨーロッパアルプスにおける日本人の紀行と記録を既刊の単行本から各々抄録・抜萃し一冊に纏めたものである。

エタンソンの谷・新田次郎(『アルプスの谷アルプスの村』より)、クライネシャイデック・藤原てい(『わが夫 新田次郎』)、マッターホルン北壁・芳野満彦(『挑戦者 阿爾プス登攀の記録』)、アイガー北壁・高田光政(『北壁の青春』)、グランド・ジョラス・今井通子(『続・私の北壁』)、シャモニの休日・近藤等(『シャモニの休日』)、たった一人の山・千坂正郎(『アルプ二九二号』)、岩と氷と寒気との闘い・小西政雄(『マッターホルン北壁』)、日本人冬季初登攀『』、アルプ日記より・佐貫亦男(『佐貫亦男のアルプ日記』)、アルプスの日本人・辻村伊助を中心に・大森久雄(書き下し)

以上の十編から成っておりバラエティーに富んだ内容といえる。現代山岳紀行というシリーズ名が示すように戦後の紀行と記録を集

めたものであるが、戦前にどんな足跡が日本人によって残されたかという視点からは、最終章に「アルプスの日本人・辻村伊助を中心に」と題し、本書のための書き下しを加えられており、戦前のアルプスにおける日本人の足跡を知るには大変便利である。

十編のうち、芳野満彦の「マッターホルン北壁」は、一九六五年八月渡部恒明との日本人による初登攀の記録であり、高田光政の「アイガー北壁」も、同年八月の、日本人初登攀の記録である。高田のザイルパートナーは、芳野とマッターホルン北壁に成功したばかりの渡部であったが完登を目前にして墜落死するという場面も収められている。小西政雄の「岩と氷と寒気との闘い」は、一九六七年二月、山学同志会の遠藤二郎、星野隆男の三人によるマッターホルン北壁日本人冬季初登攀の記録である。

この三編は、日本人によるアルプス岩壁登攀の黄金時代の幕明けを告げる輝かしい記録であるが、本書には解説や編者による注記等がなく、これ等の貴重な記録が登山史上どんな意味を持っていたかを知ることができない。

また、既刊の単行本からの抄録・抜萃になるシリーズ本や叢書類が多くそうであるように、本書もまたその性格から登攀シーンのクライマックスの抜萃に終りがちと

記念晩餐会(越後)



記念晩餐会での鏡開き／撮影・三間清治

初めて高頭翁の墓参法要にご案内いただき、これの企画に感謝し、古い会員にも久々にお逢いできて嬉しい、と祝辞を戴き、大塚副会長より、越後支部おめでとう、ただ一言「君あの山きれいだね」と讃辞を頂戴、次いで越後支部創立四十周年に因み、支部在籍三十年の二名を代表し、五十嵐篤雄氏に賞状、記念品が支部長より贈られ一同拍手のうちに晩餐会の開宴となる。

「美の川」の樽を西堀元会長、今西会長、佐藤支部長の三氏により鏡開き、会場より勢い良く気合もかき乾杯の音頭は、長老浜野正男氏から、玄さんの病氣全快を祈り乾杯と発声、酒宴に移る。

片岡博氏より奥只見の山菜を種別に紹介、マタタビの芽、アケビの蔓、フキ、アザミ、アサツキ、ウド等々盛り沢山の山菜

料理が次々に所狭しと運ばれ、美の川、大洋盛、ぶじの井の一升瓶がその間を縫って置かれ、それ飲めや、喰えやの大酒宴となる。

一方、向かいの部屋で、瓶を片手に盃を重ねながらの飯豊連峰と佐渡の四季が映写されるころには宴も最高潮、室賀輝男氏より、遠来の客人に最高の持て成しと、熊の肉と猪の肉汁が紹介され、椀に盛って配られる。

酒宴は果てしなく続く。部屋に持ち込む者、車座で飲み語る者等次から次へと瓶が持ち込まれ越後の夜はなかなか更けない。

明けて十六日、昨夜の酒量は何処へやら、全員宿酔もなくバスを連ねて八海山城内口へと向かう。車窓から望む霊峰越後三山の雄姿がいや応なしに飛び込んでくる。天気は快晴、絶好の記念山行日和。

八海山ゴンドラ駅から山頂駅まで一直線、雄大な眺望を楽しみ展望台から越後三山を欲しいままにし、一七五名の会員はそれぞれ千本松小屋を指す。ヒメリンドウの淡い紫色、雪渓近くのシラネアオイ、カタクリの群落、と真夏を思わせる日差しの中を十一時、千本松小屋着。八ツ峰に向かう者、晩餐会の続きを祝う者と千差万別。山頂を十三時に後にし、山麓駅前で二日間にわたった八十周年記念事業(越後)も大詰め。

齊藤平七氏より、こんなに多数会員の皆さんからおいで頂きありがとうございます。どうぞまたおいで下さるよう、と閉会の挨拶。

最後に望月達夫氏より越後支部の萬歳三唱でその幕を閉じた。

長岡の記念行事に参加して
越後は快晴だった。このところぐずついた梅雨

山をきれいにゴミは持ち帰り

なっているが、それぞれの文をじっくりと読むためにも、「エタソンの谷」を始めとする紀行や随想を「マッターホルン北壁」等の登攀記と切り離して独立した一冊として扱いたかったように思う。

一九八三年六月 あるつく社刊
山と溪谷社発売 B6判 二七
七ページ 定価一六〇〇円
(滝川 清)

いつまでも——山

栗石鉦吉著

著者は一九一〇年生まれ。旧制八高、東大支那哲学科卒業、長く大阪で高校や女学校の教職についてこられた。その間、なんのゆるぎも消長もなくつづいてきたのが山への愛着だという。書名はそれに拠っている。

高血圧だというのに、六十七歳の夏、ひとりで畑から茶臼岳、

山崎 安治 著

「登山史の周辺」について

岩瀬 皓 祐

本書は五年前に出版された「登山史の発掘」に次ぐ五冊目の登山史ノートである。しかしこの三月十一日、著者が急逝したためこれが最後の登山史ノートになってしまった。

本書は標題となった「登山史の周辺」を初めに「山の書物」「登山史覚書」の三部からなっている。

聖平へとテントをかつぎ、インスタントラーメンをすすり、血圧降下剤をのみながら雨の中を歩いた話のつづきがあるが、読んでいると著者の意気盛んなのに敬服する反面、大丈夫かな、と著者の身体と著者の周囲の人々のほうが気になってくるといった面がある。だから、第一部「若い時の山旅ノートから」としてまとめた、山の怪奇譚や生徒を遭難の道づれ寸前にさせた話のほうが、かえって安心して読める。

商業ベースの出版にはのりにくい内容が多いし、造本の割に定価が安いからおそらく自費出版の本であろうが、近頃よく目にするいわゆる自分史の一つで、それだけに山を終生の伴侶としてきた人のひたむきさが横溢している。

一九八四年八月茗溪堂刊 定価一四〇〇円 (大森久雄)

記念晩餐会(越後)

時の天気も一変して、あたかもJAC八十周年を祝福するかのようであった。

会場となった長岡市の北越銀行本店ホールには時間前より続々と会員が集まり、親しい仲間同士で談笑する者、或いは一階で開催されている「山岳写真展・山本五十六とバブアニューギニア展」に見入る者さまざま。その数実に三二〇名にものぼった。

記念講演会は加藤代子会員の司会により、佐藤支部長、今西会長、長岡市長(代理内藤助役)などのそれぞれの挨拶、祝辞のあと「昔の登山・未来の登山」と題して西堀元会長の講演が始まった。

西堀さんは越後の大先輩高頭さんなどの草鞋登山から今西錦司氏と同氏の性格の違いを面白くお語りまぜながら近代アルピニズムへの移行、やがてJACの原点へと帰してゆくであろう未来の多彩な登山を語り満場の拍手を浴びた。

次は茅原一也新大教授による『越後山岳の地質的特質』と題するもので、やや専門的なものであったが、素人にも判り易いようにヒスイや片麻岩といった幾つかのトピックスと豊富なスライドによる説明は有意義なもので、特に越後山地は古生層から中生層に移行しているという氏の見解は興味深いものであった。

さらに越後ならではの行事が続く。全員バスに便乗。市外深沢・正林寺のコウヤマキの巨木の下

ケ岳登山に代表される日本山岳会創期会員達による探検的登山、そして、慶応、早稲田に代表される学校山岳部によって興こされたアルピニズム(これを著者はこの本の中で、雪と氷と岩でシンボライズされた山々における登山行為と解釈している)、新ルートの開拓、

積雪期登山、バリエーションルートからの登攀、と発展してきた登山の流れを文献上の記録に当事者の直話を加えながら辿っていくのであるが、著者の最も得意とする分野だけに、この長い歴史を短かい文章の中に簡略にしかも要点をきちんと押えて書き込んでいる。

次の「登山技術の変遷」の項で著者は江戸時代の文献を丹念に読むと、この時代から登山を楽しむ人々がいたとして、池大雅、谷文晁、南橋、川村錦城、高島章貞らの名前をあげている。またこれら一部の知識人以外にも同好の人がいたとみて、近代登山の萌芽を

にねむる高頭仁兵衛翁の墓参りとして銘酒美ノ川のきき酒大会。更に夕刻会場を東泉閣に移し、本日のメインイベントの記念晩餐会となった。司会は山田智子会員で、物故会員への黙祷、佐藤支部長はじめ長老たちの挨拶、片岡博氏による本日の山菜料理の紹介。ちなみに今晚のメニューは汁、熊タヌキ、酒、マタタビ、アンニョ、山菜はアザミほか十五種類といった盛りだくさん、みな越後支部の心づくしである。儀式としては二名の支部永年会員の表彰、先ほどの美ノ川酒造から贈られた一斗樽の鏡開き、乾杯そして懇談、締めくくりに飯豊の映画と多彩をきかめた。皆は美酒と料理とその雰囲気夜に更けるのを忘れた。この行事の参加者は二五五名。

翌十六日の八海山記念山行も快晴。参加者は実に一七五名に達し、二〇数台の車を連ねて魚沼へそして午前十一時、霊峰八海山頂にJACの旗がひるがえった。

ふり返って見ると、元支部長の藤島玄さんのいつもの口ぐせ「何もしない支部」どころか、二日間にあたる工夫を凝らした行事の数々。そしてこれらの行事には越後人ならではの強く温かい意志があつて嬉しい。改めてお世話下さった準備委員各位の苦勞のほどが偲ばれ、ここに盛会を祝福し、参加者として感謝するとともに本堂にご苦勞さまで申し上げたい。

(小倉 厚)

記念晩餐会(越後)

この時代から見ることができるといっている。更に志賀重昂の「日本風景論」は、あの有名な「登山の気風を興作すべし」という一文によってわが国登山界の啓蒙書で

あるという点が強調されてきたが『登山の準備』の章にも注目しなればいけない、それはこの章があることによって、本書がわが国最初の登山技術書であるというこ

とができ、精神面と合わせて登山の実践面でもその発展に大いに寄与していたのであるといっている。

解題、解説であるが、この中では「江戸時代の山の本と資料」と「谷文晁の『名山図譜』と題する二つの解説解題文は、これまであまり類のないもので、将来に残る文献となろう。たしかに江戸時代の山関係の本についてはすでに小林義正がその著「山の書物」の中で数多く触れており、特に「江戸時代に山の文献を探る」では江戸時代の代表的な旅行記、地誌、採集記、名所図会などを紹介し、その主なものは本の写真を載せ、かつ適切な解説を加えている。この文章は江戸時代の山岳文献の解説では最も充実したものである。これに

対し本書のこの概説文では地方で刊行されたもの、あまり有名でなくこれまで一部でしか知られていなかった本、例えば一月の武甲山に登った記録のある「秩父行記」や嘉永二年（一八四八年）の富士登山記「岳遊漫録」など、ただの名文や紀行文だけではなく、もつと山登りに即したものを見つけ出し、紹介しているのが小林本にない特徴となっている。いずれにせよまとまった江戸時代の山の文献解題は非常に少なく、現在入手できるものは本書だけといっても良いくらいで、この意味からも価値あるものといえよう。

〔日時 四月四日十八時三十分 場所 ルーム〕

ニユージーランドあれこれ

講師 中村 テル

昭和三十五年の寒い大晦日、私たち五人は貨客船に乗って神戸港を出航した。今でこそニユージーランドはよく知られているが、当時は首切族がいるからと忠告されたりした時代で、われわれが遠征計画を練るために、一つとして満足出来る資料はなく、何度かNZ大使館に足を運んだり、主人の友人の商社の人達や、外務省関係の方々など、誰でもよい、一度でもNZに行つたことのある人を片っぱしから訪ねて、出来る限りの情報を求めなければならなかった。

今は絶版になった私共の本「女五人ニユージーランドを行く」(実業之日本社)は、NZに関する日本語で書かれた最初のものである。主にわれわれの遠征隊の記録、親善行事、NZの人情風俗を記したものである。二十五年後の今日でも、まだまだ参考になる所が可成りあると思われる。ただ当時と比べて一番違う点は、昨今はクライストチャーチ市を始め、オークランドなどにも大きなビルディングが増えたようである。

温泉といえば、ロトルアのこと、代表的な場所だからであるが、当所は日本からの観光客

も多く、マリオ舞臺などは、定期的にホテルでショーをするほど盛んになっていた。また、家族連れで泊まれる清潔なモーテルも、たくさん出来た。私は一九六一年から後も、四度にわたって訪問している。その都度、タスマン氷河奥の山へ登った。しかし天候やクレパスの条件がわるくて、いまだにクック山には登れずにいる。最早やこの年では、無理のような気がしてならない。

NZ人の心の暖さは通りすがりの観光客に対しても、それが感じられるくらいで、スキーに出かける連中も、彼の地の人情に魅了され心と心の深いきずなが生れ、毎年行かずにはおられなくなるようだ。一九六一年に初めて会ったノーマン・ハーディ氏や、クインズタウンでわれわれのために宿を探してくれた、マクラーレン夫妻など、それ以来、日本人以上のおつきあいを続けている。特にハーディ氏は、NZ山岳会会長を長く務め国立公園の理事でもあり、親日家でJACで講演されたこともあるので、ご記憶の方もあらうと思う。NZは、南極に一番近い国である。特に、クライストチャーチ市には南極事務所があり、またクック山地への足がかりとしても大変便利な都市である。市の中央を流れるきれいな川、その両岸には桜並木やたくさんの水仙が色とりをそえ、整然とした文化都市でありながら、美しい自然を愛する市民の心が、街角、街の通り、個人の家、庭先に至るまでにじみ出ているようで、日本人の私にとってはまことに羨しい限りであった。

(文責 早川瑠璃子)

主催 海外委員会

「谷文晁の名山図譜」は文化二年に刊行された同書の解題であるが、ただそれだけに止まらず、著者の谷文晁、発案者で編者の川村

錦城のことについてはもとより、序文を寄せた人たち一人一人についても調査し論考を加え、その人物像を明らかにしているのが一つの特色となっている。もちろん異版本に関しても比較検討を加えているが、その結果、従来名山図譜の刊行は文化元年九月とされていたが、実際の刊行は翌二年正月であったことを見つけ出している。またその上、ここに収められている八十八座の山に対し現在の山名、標高、所在地を、これまでの同書の研究書「随筆日本名山図会」(新編・日本名山図会)を参考に会員武田満子氏の協力を得て一山ずつ調べて決定づけている。

第三部「登山史覚書」は前書以後登山史に新しく書き加えた訂正すべき記録として、昭和七年十二月の青山学院鹿島槍ヶ岳登攀の記録と、ガウランドの槍ヶ岳登山が明治十一年ではなく明治十年であったことが確認されたとしてこの二つを採り上げている。これはわが国の登山史が明治以降の主な記録に関しては著者の努力によりほぼ確認され完成されたと思っていたが、地道な調査研究や資料の新発見によつては、まだまだ重要な記録でも書き替えられたり加えられたりする可能性のあることを示唆するものである。

毎週金曜、土曜の二日間、東京神田の古書会館で古書即売会が開かれている。初日のお昼ころ会場

に行くのと良く著者の姿をお見掛けしたものである。棚の本に真剣な眼差しを注いでいる姿にはちよつと近寄り難いものを感じ、目が合っても話しをすることなくただ黙札するだけであった。この本に書かれている数々の文章の裏には、こうして蒐めた直接間接の資料の裏付けがあるわけである。しかし決して文献だけに頼ったり資料の積重ねだけを重視したのではない。機会があれば実地によって検証することを尊しとする著者の態度は、川村錦城の墓を駒込に探し当てたり、また徳本上人の名号石を信州の現地に訪ねる「徳本峠と徳本上人」の文章にそれが良く表われていると思う。

最後の文章「青春の山」は中学時代、山が自分の心に大きく占めるようになった笠ヶ岳登山から、早稲田山岳部に入って本格的な登山と取組むまでを、ふとしたことから生涯の友となった金坂一郎氏との友誼を交えながら回想風に書いている。著者は長い間、日本の登山史上に登場する人々に替っての報告者であり代弁者でもあった。今回初めて自分について語ったのであるが、それにしてはあまりにも少なく短か過ぎた。もともと著者の話しを聴きたかったと思うのは決して私だけではない。

本書は一部を除き山の雑誌などに一度発表したものに加筆して一



東・西
南・北

国際色豊かに

上高地で歌の交歓

坂倉登喜子

島々谷は花盛り

新緑の山肌を色彩する紫色の花が島々谷を遍る私たちの頭上に、「あ、きれいな桐の花……」と眼に飛びこんできた。

白い花房を随所に見せるのは、ニセアカシヤの匂いのよい藤のような花だ。「天ぶらにして食べられる……」と、誰かが越後の野外天ぶらパーティーを思い出させる。

割合早く二岐に着いた私たちは足の遅い先発隊は、岩魚止小屋に泊って二日かけて徳本峠を越えようという、のんびり組十名のパーティー。梓河畔に座りこんでお得意のエーデル風サラダを作り、昼食をしていると、後から親子四人のファミリー登山者が登ってきた。

近づいて気がつく、何と今夜泊る岩魚止小屋の奥原英考夫

婦と子供二人、背中に大きなザックを背負い、前に子供を抱いての小屋入りであった。

私たちは夕方までに着くからと挨拶して、ゆっくり昼食をすませ、愈々島々谷を邁って行った。

いつもながら左斜面にミヤマカタバミの群生が見られ、歩むにつれて今年は二週間くらい春の訪れが早かった故か、実に花々が多く真盛りで、あれは何これ何と、今回は新人が多かったため、花の名を聞かれるので忙しい。特に今年はいつもなら二、三本しか見つかからないヤマシヤクヤクの花が、四、五ヶ所約二十本くらい見つけることができ、初めての人たちは歓声をあげ、崖の上に登り写真撮った。

また思いがけない場所にシヤクナゲやコイワカガミが咲いていていつもなら季節のずれで見られない花々が咲き揃い、正に島々谷は花盛りで、とても楽しかった。

岩魚止小屋から徳本峠
今年もまた新たな花々に迎えられる、小鳥の声を聞きながら、もう直ぐ小屋という所の先代の小屋主のお墓に花を捧げ、一休みして小屋に着くと、奥原夫婦は夕食の山菜料理の支度で大忙しであった。

その夜は私たちエーデルワイス・クラブ一行だけで、ランプの下に集いワインと日本酒で明日の山気を祈りながら乾杯、数々の山

菜料理を賞味して、焚火の匂いになつかしみながら早く就寝した。

翌朝は七時出発、今年は残雪も少なく道もよく補修され、去年よりも道の整備ができていて歩き良かった。途中残雪を踏んで登るほどに、水場付近で夜行で来た大阪のパーティーに追い越される。いつも私たちがニンソウの小径と呼んでいる登り道で、今年はサンカヨウの大群落が見られエンレイソウも多く、左右の斜面は花で埋まっていた。

最後の水場を過ぎて愈々カーブが始まるころ、アメリカ隊の一人が半ズボン姿で足早に来た。予想通りキャニオン・クラブの人で私は拍手で歓迎した。また女性を混えた一行数人、その後からさらに半数のアメリカ隊が登ってきた。

この人たちは上高地を四時頃出て二十名の内の半数が峠越えの記念山行に参加したのだった。私たちが峠の小屋で昼食をしていると上高地側から今西会長ご夫妻や原会員が登ってこられたので、記念撮影をして一緒に下った。明神で後発隊を待ち全員合流して裏道から自然歩道を通って上高地西系屋へ着いた。

食後はロビーにアメリカ隊をお招きして、ささやかなティーパーティーを催し、プレゼントの交換をして、約一時間なごやかに歌の合

唱で交歓した。

エーデルワイス・クラブがウエストン祭に参加していることをどうして知り、照会してきたのか尋ねると、ロスアンゼルス(JTB)から東京のJTBに問い合わせがあり、そしてエーデルワイス宛に手紙が来たというわけだった。

ウエストン祭が国際的になり、アメリカ人にも上高地の美しさを覚えて何よりと思つた。

梓河畔に響いた大合唱

六月二日碑前祭の朝は今年も快晴で、小鳥の声に目覚め、早速西系屋横で八時半からコーラスの練習を始める。前夜発の会員や当日朝上高地へ集結したコーラス隊は約六十名、アルプス少年少女合唱団に加えて、今年

はアメリカ隊が二十名、真赤なTシャツのお揃い姿で参列、報道陣のカメラの砲列にたじろぎながら、私のリクエストで、「ユー・アー・マイ・サンシャイン」を、女性の指揮による合唱で、手拍子を合せ、正に碑前の合唱交歓会となり盛り上がりを見せた。最後に「今日の日はさよなら」を合唱、来年もまた上高地で会いましょうと、別れを惜しみつつ、第三十九回ウエストン祭は終了した。

第三十二回ウエストン祭のと

冊にしたものである。色々な文章を一つに蒐めると雑然としてままりに欠ける恨みがあるものだが、この本はそれを全然感じさせない。それは著者が、種々内容の異なった文章を書いても、その底流には一貫して日本の登山史という力強い確固とした大きなテーマを持っていたからであろう。

昭和五十九年七月発行 A5判 三二五頁 茗溪堂 三八〇〇円
(本稿は岩瀬氏に特別お願いして長めに書いて頂いた。書評委員会)

●報告●

第三十九回

ウエストン祭

信濃支部

日本山岳会八十周年記念、第三十九回ウエストン祭は、昭和六十六年六月一、二日の週末、新緑の上高地で行われた。

一日目は「記念山行」。島々宿から島々谷を遡り、徳本峠を越えて上高地に至る十時間の山旅である。朝六時、島々谷出合いの広場での出発催事のあと、各自マイペースで歩き始めた。日頃は、人の気もないこの峠も、きょうばかりは追いつ抜かれつ、北アルプスの祭りの日街通りのよう。例年、この行事にあやかっただけで峠を越える若い登山グループもいて、その数合わせて六百。山は深いがよく整備された、この昔の山の先

き秩父宮妃殿下がご参列になられ、そのときの感涙も心に残る思い出であったが、今回のキャニオン・エクスプローラーズ・クラブの、女性を混えた二十名の自然探険隊が来日し、日本の山岳会と交流を深めたことは、まことに素晴らしい思い出であった。日本山岳会新旧会長、また英国大使館のゴードン・トム一等書記官のご挨拶など、今までにない最高に記念すべきウエストン祭であったことを喜びたい。

なお今年は横有恒氏が最後に

越えられた八十四歳の峠越えにあやかっただけで、信濃支部の高山忠四朗氏が、今年同年で峠越えされたのはまことに素晴らしいことで、若い会員たちに奮起を呼びかけた思いがした。

来年は第四十回のウエストン祭を迎えるが、日本山岳会会員が徳本峠を越えて、ウエストン祭に大勢参加し、ウエストンに

達の通い慣れた道に、終日、人通りの絶えることがなかった。峠では明神、穂高は眠たげなものの、歓声は聞かれなかったが、小屋の熱い甘酒のサービスに歓声が上がった。

また、峠では、今西会長がご夫婦で登って来ておられ、重い足を引かず登ってくるわれわれを迎えて下さった。会員にとっては

捧げる歌の合唱に協力して欲しいと思う。

私たちエーデルワイス・クラブ合唱グループは、昭和三十二年から日本山岳会の歌の講習会で指導を受けた平野先生に、引続きその後二十八年間上高地に同行願って歌い続けてきた。

毎年このことながら信濃支部の皆様始め現地協力者の協力で、盛大な山開きが開催されてきたが、今年は特にアメリカ隊の参加で国際的となり、大合唱も盛り上がり、正に岳人の祭典となり大感激だった。

第八回

丹水会例会

(6・15・6・16)

『山崎さん、網蔵さん、ロッヂ峠の後藤さんの追悼会も併せて行います。なお、今回から趣を変えて、丹沢に精通されている方の話を聞く会を計画しております』と、案内をいただいた丹水会例会。

勇気百倍の喜びであった。

峠越えの最高齢者は名誉会員、信濃支部名誉支部長高山忠四朗氏、八十四歳。それに同支部の明治生れの毎回参加、宮原、田中、中村の三先輩も加わって、小学生から長老格まで多士済々であった。

毎年、地元安曇小学校の有志児童が参加してくれたが、今年は村

降り続いた雨も中休みに入り、待ってましたとばかりの登山者で混み合う沢沢、大倉を経て、今宵の宿舎であるロッヂ「峠」へ。

聞く会は、丹沢に五十年來、通って来られた丹沢のバイオニア、石川治郎氏の話である。資料や写真をもとに詳しく、優しく、丹沢の今昔を語る氏の声には、丹沢に対する愛着がこめられ、聞く者に親しみ深く伝わってくる。

六時をまわって人も揃ってきたころ、すっかり身になじんだ揃いの伴天で食堂へ。

まず、亡き山崎、網蔵、後藤氏の冥福を祈り黙祷、網蔵卓爾氏、後藤夫人の話。また親交の深かった方達からの故人をしのぶエピソードや、数々の思い出話のうちに懇親会に入り、丹水会の夜もたけなわとなる。堪酔会(?)の名の通り各地の銘酒が披露され、めいめいが親しく楽しく飲み食べ夜が更けるまで語り合う。後藤氏の三年がかりの手づくり、という宿

は、すみずみまでぬくもりが感じられ、快よく深い眠りに陥る。

翌日は水無川、モミソ沢の沢登り、短い小沢ながら谷歩きのおもしろさが味わえる沢であった。常よりは幾分水量が多いといわれる沢を参加者二十二名の老いも若きもが、がやがや賑やかに元気に登る。

復路は、流れの沢を下ることとし、源頭の明るいところで、ワインに、コーヒーにと、次々に量よし、味よしの昼食をとる。

エゴノキの可憐な白い花が川面に浮かぶ沢筋に別れを告げ、ロッヂ「峠」にもどる。

賑やかに打ちあがりの乾杯をし、またの出合いを約束する。今回もまた人の和に、丹沢の水に、丹水(堪酔)しきった例会であった。

(細井澄子)

東西南北

層の厚さを思わせた。揃いの真紅のTシャツがよくお似合いで、道端の新緑に映えた。

「前夜祭」は支部員を中心に、祭典本部のある上高地西糸屋山荘に約七〇名が集まって、盛大に開かれた。本会からの今西新会長、佐々前会長、大塚副会長はじめ、多数の新旧役員と、英国大使館より大使代理として、ゴードン・トム

図書受入報告

図書委員会

昭和60年1月分受入図書(つづき)

16. 現代山岳紀行編集室 山下喜一郎編「現代山岳紀行 白馬、後立山連峰」あろく社 1982(山と溪谷社寄贈)
 17. オーレル・スタイン著「アレクサンダーの道」白水社 1984(版元寄贈)

2月分受入図書

1. 本多勝一 武田文男共編「植村直己の冒険を考える」朝日新聞社 1984(田口二郎氏寄贈)
 2. 仙台一高山の会 天山登山実行委員会編「天山博格達IV峰登山報告書 1984」1985(柴崎徹氏寄贈)
 3. 大内尚樹 新隆浩共著「登山入門シリーズ 1. 登山の知識と計画」山と溪谷社 1985(版元寄贈)
 4. 大内尚樹 新隆浩共著「登山入門シリーズ 3. 雪山の基礎技術」山と溪谷社 1985(版元寄贈)
 5. 廣瀬誠著「立山黒部奥山の歴史と伝承」桂書房 1985(版元寄贈)
 6. 久合田弘著「エーデルワイス」大阪書籍(発売) 1985(著者寄贈)
 7. 成田俊夫編「そしてケルンに残った 桃源境から白き峰へ」1982年カラコルム登山隊実行委員会 1982(編者寄贈)

一等書記官殿も列席した。翌二日「碑前祭」。幸いに「雨のウエストン日和」ならぬ晴天に恵まれ、梓の清流はうたい、ケシヨウヤナギのほわたが舞った。ウエストン師前には、来合わせた観光客も飛び入り、ざっと千百人が参集した。赤、黄、青、と色とりどりの登山シャツ、運動着姿の老若男女、幅広い年代の人達で広場は溢れた。

祭典は十時から。多数の来賓を迎え「エ」クラブの女声合唱「エーデルワイスの歌」により始まる。今西会長、蒲生支部長の挨拶に続いて献花に献歌。献花は地元安曇小学校の児童二人「全国花いっばいの会」から一人とで行なわれ、日頃は、うす暗い木立の奥に囲まれたウエストン師のレリーフも、華やかな季節の花束に、心なしかほほえんでいるよう。献歌は「エ」クラブの「ウエストンに捧げる歌」。参会者全員でウエストンをして、山の安全を願って黙とうがあり、来賓を代表してゴードン・トム一等書記官、地元代表 和合正治松本市長、続いてアルプス少年少女合唱隊の「夏の山」の二部合唱。そして今年は、昨日、山を越えた碧眼赤シャツの山のぼりの仲間の「ユー・アー・マイ・サン・シャイン」斉唱のおまけまでついた。はじめ処女のおきサンシャインも、彼等を囲んだ何百人もの手拍子に元気づき、ダットスの如く終り、さ

かなな拍手を受けた。山を愛し、「自然を愛する心は洋の東西を問わず変わらぬ」との感動を覚えた一カッとなつた。

記念講演は大塚副会長の「植村直己のことなど」、近藤評議員の「ウエストンと初期山岳会の人々」近藤氏は、本会の創立当時の人達とウエストン師との結びつきを中心に、本会を築いた諸先輩の人間関係にふれて、得難く、興味深い話をされた。そして、その中心になった小島鳥水について興味を持つ仲間にも共同研究の呼びかけをされた。大塚氏は、大学の後輩にあたる植村直己氏の横顔を、先輩としての愛情をもつて語り、その温かな心のふれ合いには、山男の心の絆の何であるかを教えるものがあり、深い感動を与えた。

最後は、また、来年もこの広場で、穂高、霞沢の峰々を共に仰ぐことを約して、皆で「今日の日よさよなら」を歌い、散会となった。

(一志幸夫)

祖母・傾山系の原生林
保護と伐採施設計画
見直しのための
要望書提出

東九州支部も大変心配しているとの連絡を受け、自然保護委員会では昭和六十年三月、中村純二等が現地に出かけた。東九州支部の大串会員、熊本支部の石井会員や宇目町の方々と共に伐採地を歩き、別掲のような要望書を五月十日付で林野庁並びに環境庁長官あて提出することになった(五月理事会承認済)。

これに対し、文書による回答は未着であるが、林野庁 営業企画課より口頭にて左記の連絡を得ている。これには東九州支部野口支部長はじめ地元の人々による「大分の森を守る連絡協議会」の発足

会務報告

六月理事会

6月18日 午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副

会長、鳴原、大橋、松永、浜口、

梅野、高遠、新井、岡沢、太田、

平井、大森、絹川、関塚各理事、

竹田、金坂監事、松田、中村、大

森各評議員

委任 橋本、鈴木理事

審議事項

○常務理事の選任・理事の業務分

担

会長 今西寿雄

副会長 山田二郎、大塚博美

常務理事 橋本清一 財務部門(財

(五月十九日)も大いに寄与しているものと思われる。

(1)観音滝周辺並びにシオジ単純林の伐採は中止する。

(2)今後植林を行う場合、できるだけ混合植林を行い、広葉樹との混合植林も林業試験場で開発するよう指導して行く。

(3)祖母・傾地域の伐採は択伐を原則とし、地元とも協議して実施する。

更に白神山地の広域のブナ原生林についても、その保存に関心のある旨の発言があった。

(自然保護委員・中村純二)

務)担当兼財務委員会担当、鳴原啓佑―総務部門(総務、海外集会、会報、山研)担当、大橋晋―情報出版部門(山日記、書評、フィルム、図書、山岳)担当兼書評・図書委員会担当、松永敏郎―指導研究部門(高所、遭難、指導、青穂、学生部)担当兼高所登山研究・遭難対策委員会担当、浜口欣一―科学部門(科学、自然保護、医療)担当兼医療委員会担当、梅野淑子―婦人部門(婦人)担当兼婦人懇談会委員会担当

理事 高遠宏―総務委員会担当兼科学研究委員会担当、鈴木邦之―海外委員会担当、新井陽一郎―集会委員会担当、岡沢祐吉―会報委員会担当、太田晃介―山

研運営委員会担当、平井吉夫―

山日記委員会担当兼フィルム委員会担当、大森

久雄―山岳編集委員会担当、長

谷川良典―指導委員会担当、絹

川祥夫―青年懇談会委員会担当、村木富士―

学生会指導委員会担当、関塚貞

亨―自然保護委員会担当。

報告事項
○各委員会報告
○八十周年関係事業について各分科会の報告、予定説明

○評議員会を七月五日に開催

○中国登山関係の壮行会および結団式を七月六日私学会館で開催

七月理事会

7月10日
午後6時30分

場所
本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副会長、橋本、鳴原、大橋、松永、

浜口、梅野、高遠、鈴木、岡沢、

太田、大森、長谷川、村木、関塚

各理事、竹田、金坂監事、松田、

宮下評議員

委任 新井、絹川理事

報告事項
○評議員報告
○評議員の選任、名誉会員の推薦その他

○理事担当と常務理事の確認

○支部長会議兼事務担当者会議を八月二十四日椿山荘で記念式典開催前に行なう

○八十周年記念事業関係詳細は別途会報に発表

○委員会報告
各委員会の行事予定等の報告あり、今年度ではできるだけ各委員会と共同で研究会、講演会、講習会等の行事を行なう。

評議員会

7月5日 午後6時

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副会長、田口、望月、織内、村山、

渡辺、越智、松田、近藤、山口、

中村、宗実、大森、田中、宮下、

安間、佐々木各評議員、金坂監事、鳴原、高遠理事、

委任 伊藤、中世古、吉田各評議員
議長には互選で田口評議員が選出され議事に入る。

要 望 書

殿

社団法人 日本山岳会
会長 佐々保雄
自然保護委員会委員長 国見利夫
東九州支部 支部長 野口秋人

祖母・傾山系における原生林の保護と伐採施業計画の
早急な見直しについてお願い

我々日本山岳会では、自然保護・保全についても大変関心をもっておりますが、今回貴庁に御検討頂きたい問題が出て参りましたので、ここにその概要を記し、十分な御理解と御英断を頂きますようお願い申し上げます。

照葉樹林と温帯落葉樹林(ブナ林)は我国固有の文化の母胎となった昔ながらの珍しい林型ですが、これらの分布が、現在高度的に上下に接して見られるのは僅かに、九州と四国の山地に残るだけです。

特に祖母・傾山系では、広域の原生林が見られ、地質的にも様々な地層が入り交じって素晴らしい景観が作られているので、長年に亘り現地の人々の心のよりどころとなって来ました。東南アジアから南西日本にかけての温帯な森林地帯は世界の生物の宝庫と言われるだけあって、祖母・傾山系にはニホンカモシカやヤマネなど野生動物をはじめ、ヤマセミ、サンショウウオ、イワメ、あるいは植物ではシオジの単純林やアケボノツツジ、キレンゲショウマなど珍しいものも多く、学術的にも貴重な存在です。同時に、これら原生林は清浄な水や空気の供給源となり山地の崩壊や土石流を防ぐという重要な役割も果たして来ました。このように原生林は木材としての経済的な価値だけでなく、文化的、環境的、防災的乃至学術的価値をも併せ持つものです。

ところで原生林地域はその大部分が気象条件の厳しい稜線とか、急斜面、あるいは表土層の薄い岩石地帯に属しているため、ひとたび森林が伐採されるとその修復には数百年以上もかかり、場合によっては永久に回復できないこともあります。一方伐採によって山地の崩壊や溪谷の破壊が進み、地元住民の生活や文化がおびやかされることも明らかです。このような状況から見ると、材木の価値だけを対象とした独立採算制原則に基づく山地原生林の伐採は、即時中止の必要があるように思われます。勿論、国際的な木材事情の立場から、我が国内における造林計画の開発も必要でしょうが、それらは植林に効果的な緩傾斜の山麓地帯などを選んで行なうべきではないでしょうか。

最近傾山南面や藤河内溪谷上流一帯の原生林が相当広範囲にわたって伐採されたことに対し、大分県宇目町では、町議として、伐採の即時中止の要望書を延岡営林署に、さらに同様趣旨の請願書を県議会に提出しています。祖母・傾の自然を守る問

題は、宇目町、緒方町、三重町、北川町、北方町、日之影町で構成された六町協議会でも議決され、さらに大分県、宮崎県、熊本県にまたがる広域の人々によっても次々に取り上げられていきます。

私共日本山岳会自然保護委員会でも東九州支部や熊本支部の会員と共に祖母・傾山や藤河内溪谷の現地視察を行ないましたが、至る所で山地の崩壊や岩石地の表土の流失、水源の枯渇などの傷ましい姿に接しました。その結果、現状のような伐採施業が続けられる限り、貴重な自然の喪失は、やがては我国の山岳地域全体に及び、取返しのつかない状態に陥るであろうことを沁々と感じました。

ここに要望書を作成し、次の3点について何分の御検討を頂くよう衷心より御願い申し上げる次第です。

- (1) 秘境といわれる山岳地帯、特に祖母・傾山系における伐採施業計画の中止を、独立採算制原則の例外適用も含めて御検討下さい。

一般に稜線や急傾斜の土地、岩石地帯等では植林は効を奏せず、一度伐採すればその修復は殆ど不可能であり、災害を招く上、自然の尊い恵みまで失ってしまうからです。

- (2) 山麓地帯の植林を目的とした伐採においても、皆伐でなく択伐を原則とし、植林樹種として広葉樹を加える技術の開発とその実施をお願いいたします。

皆伐では植林が順調に進行せず、その間、土壤破壊など起こす可能性もあります。一方ヒノキ・スギなどの針葉樹と共に、カエデ、ナラ、カシ、シイ等広葉樹の混合植林を行なえば、生態系の保全、景観の回復、土質や保水量の確保、災害予防などの効果を望むこともできるからです。

- (3) 生活や文化の結びついた地元関係者と協議の上、可及的速やかに新たな施業計画の打出されることを希望します。

施業計画の見直しに際しては、できれば地元関係者と現地に赴いて協議を行ない、一日も早くその地域に即した結論の出されることが望まれます。人類共有の財産として次の世代に伝えるべき貴重な自然は、それ程の危機的状況におかれていられると考えられるからです。

貴職におかれましても、この地域の、他に例を見ない自然環境に十分御配慮を頂きますと共に、修復の考えられない原生林の皆伐については是非とも見直しの御検討を頂きたく、その上で、できるだけ早い機会に何分の御回答を賜りますようお願い申し上げます。

昭和 60 年 5 月 日

審議事項

○常任評議員互選の件
互選で、松田、山口、中村、宮下各評議員が常任評議員に選任

○名誉会員推薦の件
今年度は八十周年記念式典・晩餐会において、名誉会員を推薦、会員章授与を行なうため、例年より早い時期に推薦することになり、検討した。発表は八月二十四日。

報告事項

○会務報告、理事の担当について、八十周年記念事業について、会員名簿発行について

・ルーム日誌

六月

3 日 月	總務委
5 日 (水)	八十周年展委員会
12 日 (水)	理事会準備会
13 日 (木)	学生部集会、図書委
16 日 (日)	科学委気象の話
18 日 (火)	中国登山隊準備会
20 日 (木)	学生会、書評委
22 日 (土)	科学委探索山行(志賀高原)
24 日 (月)	八十周年展委員会
25 日 (火)	自然保護委、婦人部
27 日 (木)	登山史の会
28 日 (金)	学生部集会
	科学研究委講演会

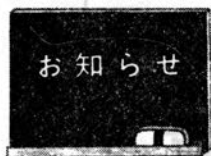
会員移動

改姓

9270 平井 祐子→押谷へ
9122 永山 三彦→渡辺へ
9000 小森谷 春美→新井へ
退会

8370 中野 修美
8277 藤井 猛
9271 中川 邦弘
宮城支部長
4817 庄司 駒男

お知らせ



234-6659

この電話でもお知らせしています

創立八十周年

記念晩餐会(富山)

秋の富山県上市町で富山支部、石川支部共催による講演会、映画会、劔岳の麓―馬場島で晩餐会を次のとおり開催します。翌日は自由山行です。黒部、立山、劔へどうぞお出かけ下さい。

記

日時 九月二十八日(土)午後〇時三十分から

場所 上市町文化会館(富山県中新川郡上市町法音寺一)
Tel. 0764-73-1818 九月開通予

物故

7799 養父 孝太郎

休会 6824 丹治 計二

八十周年記念事業第二次募金応募者芳名

(昭和六十年七月八日まで、敬称略、順不同)

(二〇〇) 外山義夫 大沢伊三郎
(一〇〇) 国分勘兵衛 (四〇〇)
船越好文 河野之保 (三〇〇) 池元善秋 (二〇) 賛田統亜 湯口康雄 熊田宗次 吉田辰明 早川
英夫 降旗 孟 安藤信正 神原忠夫 今沢 寛 福重俊二
(一〇〇) 江藤秀一 百田治人 大場撰雄 野口礼子 青木 繁 衛藤昌平 小松善弥 五十嵐篤雄

定

行事 講演会 午後一時(講師 西堀栄三郎氏)、映画会『白い魔の山』ナンガバルパット富山隊撮影、登山用具展示(ナンガバルパット富山隊装備品ほか)

会場移動 午後三時~四時 馬場島家族の森へ
晩餐会 午後五時~七時 馬場島家族の森、宿泊
会費 一〇、〇〇〇円(晩餐会、宿泊費、移動バス代ほか)

九月二十九日(日)は自由山行申込先 千330 富山市白銀町二一五(株)若林商店内
日本山岳会富山支部
(Tel. 0764-23-1186)

日本山岳会(東京)事務局
(Tel. 03-261-4133)

JACC夏の恒例・

ビアパーティー

日時 九月七日(土) 十八時半より

場所 日本山岳会 集会室
会費 二、〇〇〇円
飲み放題食べ放題!!
主催 婦人懇談会

温泉と写真の山旅

このたび集委員会では写真教室を開くにあたり、写真のうまい人もへたな人も含めて、写真に興味ある人を対象として会を開くことになりました。今まではある程度写真をかこなしていなくて参加できないのではないかと考えていた人でも自信をもって参加して下さい。

日時 十月二十五日(金) 二十二時
場所 安達太良
会費 会員一万七千円 非会員一万九千円(バス代含む)

講師 渡辺正臣氏
申込 山岳会事務局

●なお写真勉強会を十月十七日、発表会を十一月六日にルームで開きます。

現地小集会

会員で山に登ることが好きな人のための小集会として企画しました。参加をお待ちしております。
場所 碧岩・大岩(西上州・群馬南部)
日時 十月十日(木) 九時半
ルート 下仁田集合 日帰り
↓碧岩→大岩→砥沢→下仁田(歩行時間五時間)
地図 十石峠(五万図) 地図に山名なし
申込 山岳会事務局
集委員会

編集後記 いつもこの欄を読む会員諸氏なら先刻承知のことばかりで、むしろそうでない、自分の書いたものだけ見る人に読んでもらいたいのですが、兎に角、再度編集からお願いを書いています。
▼ご寄稿頂く場合の文の長さは四百字詰の原稿用紙で二枚半くらい(約一千字)でお願いします。
▼できるだけ大勢の会員、できれば全ての会員に一度は寄稿をお願いしたいと思っていますので、何回も登場してくれる会員諸氏には、この点を特にお願いいたします。
▼図書紹介原稿は書評委員会より依頼し、その依頼状でも原稿の長さを指定しています。しかしこの方も、そういった箇所が目に入らないのか、長い原稿が寄せられてくる場合があります。
▼また会報も五〇〇号近くなると以前掲載されたことのあるようなものが寄稿されてくる場合があります。
▼以上のような原稿の採否、一部削除は編集委員会に一任願います

昭和六十年八月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイム四番町

発行所 法人 日本山岳会
発行者 今西 寿雄
編集代表 岡 沢 祐吉
電話東京(2) 四四三三
振替口座 東京三一四八二九番
東京都港区赤坂二丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂